高山坦三先生を偲んで

渡辺　左武郎

日本医史学会名誉会員高山坦三先生は、昭和六十三年六月九日、急性心不全で逝去された。享年八十一歳であった。

先生は明治三十九年北海道小樽市のお生まれで、昭和六年北海道帝国大学医学部を卒業されただちに外科学を専攻、昭和九年同大学医学部講師に進まれたが、昭和十四年五月から二十一年二月までの六年半の長い期間を陸軍軍医として応召、中国大陸において戦傷患者の治療に名を挙げられた。復員後は北海道大学に復帰され、助教授に昇進されたが、昭和二十七年乞われて札幌医科大学教授となり、十八年の長きにわたって外科学教室を主宰し、その間二百名に及ぶ門下生を指導育成された。

高山　坦三先生

先生は昭和四十五年大学の停年を待たずに職を辞されたが、長年の功績によってただちに同大学名誉教授の称号を授与された。

先生は専門の外科学においては、北海道随一の手術の名手としての令名が高かったが、外科学の歴史についての造詣が深く、すでに昭和三十年に『日本外科全書』に外科史を執筆され、さらに昭和四十三年に出版された『現代外科学大系』に西洋外科史、日本外科史（付東洋外科史略）を執筆されていることは広く知られているところである。

その先生が、六年半に及ぶ応召の期間中に六冊の医史学に関する書籍を出版していることは、まことに驚嘆に堪えないところである。とくにライプチッヒ大学医史学教授のジーベルト博士の『医学序説』を愛読され、その翻訳を志し、北支河南省の野戦病院で、戦傷患者の治療を終えてから、うす暗くゆらめく蠟燭の光をたよりに、この難かしい著述を翻訳された先生の卓抜の語学力と深い教養には、ただただ敬服するのみである。

しかも先生の学者としての良心は、戦塵の中で書き記したものに満足することをいさぎよしとせず、『物語り医史』は稿を改めて昭和三十八年に、『医学序説』は昭和五十六年に慎重な改訳の上出版されたことはまことに見事というほかはない。

高山先生は、厳格な学者であるとともに、お宅の庭に立派な茶室を持っている数寄者でもあり、歌舞伎をこよなく愛し、音曲にも詳しいという、江戸趣味の通人でもあった。先生が昭和五十六年に展望社から出版した『伝説史話の詮議誌』という変った題の本は、医史だけの本ではないが、内には先生が晩年よく調べておられ、札幌で開かれた第八十二回総会の会長講演で話された関寛斉のことが、医療史戊辰戦争として取り上げられている。この本が先生の最後の著書になったが、私はこの本がもっとも高山先生らしい本だと思っている。

北海道には、戦前医史学の泰斗として著名な関場不二彦博士がおられたが、高山先生には関場先生の後継者としてもう少し長寿を保たれ、医史学についての先生の蘊蓄を伺いたかったと残念に思っている。幸いにして北海道でもこの頃医史学の愛好者が増え、グループによる勉強も始まっている。先生の御霊前にこのことをお知らせして、先生の御冥福を祈って止まない。